
【Steins ; Gate】 永久不変のアフェクション 二次創作

じじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【Steins;Gate】 永久不変のアフェクション 二
次創作

【Nコード】

N1955Z

【作者名】

じじい

【あらすじ】

岡部倫太郎は、あの3週間を乗り越え平穏な毎日を送っていた。当たり前とは言い難い普通の日常、他人から見たら価値のない日常かもしれないが、岡部倫太郎自身はそんな日常を心の底から喜び、何も起こらない日常を歓迎していた。だがそんなある日、街中で不思議な出会いをする。

運命の出会い？（前書き）

シユタインズ・ゲート到達後のお話し。アニメ・ルパン三世で使われたネタを使っています。やりたい放題書いてるので、ツッコミどころ満載です。

運命の出会い？

時空間の迷子

「俺だ、どうやら機関の罫に嵌まったようだ。いや助けはいらない、これは1人で何とか出来る範囲だ。これも予想していたケースの1つ。なに、この俺にかかれれば造作も無いことだ。しかし、マッド・サイエンティストとあるう者が愚かにも他人の手の平で踊らされるとはな…、俺も落ちたものだ…ああだがしかし俺の野望はこんな所で終わるようなものでh」

「はいはい分かったから、ささっとして行ってこい！私プリンだからね」

「僕はゼロカロリーコーラよろー」

「まゆしいはジューシーからあげNo1!」

「…はあ、俺が負けるとは…」

ここはラボ、日夜未来ガジェットの開発が行われている場所である。そんなラボの長でもある俺が、何故パシリの様に買い物に行かされようとしているのかと言うと、買い物に行く者のを決めるじゃんけんに負けたからである。チョコキを出せばよかった…。

「あ…助手はプリン、ダルはゼロコーラ、まゆりはジューシー唐揚げ、だな行ってくる」

「行ってらしゃーい」

「寄り道しないで早く買って帰ってきなさいよ」

「ツンデレ乙！」

「誰がツンデレだ！ていうか橋田、ここでエロゲするなとあれほど…」

バタン

（賑やかだな…これもあの3週間があればこそか…）

あの3週間からもう1年ほど時間が経っている、今日は2011年7月21日、去年のこの日俺は紅莉栖と出会い、あの永かった3週間を過ごすこととなった。今は紅莉栖がアメリカから夏季休暇でこちに来ているため、あの3週間と同じような状況になっている。変わった事と言えば1年がたったため、皆進級している事ぐらいだ。

1年前の事を思い出しつつコンビニへと足を進める。

「暑い…じゃんけんに負けただけでこんな灼熱地獄を味わうことになるとは…」スタスタ

「！？」

「何だ？事件か？」

前方を見るとお巡りさんに話しかけられている子供がいた、どうやら迷子のようだ。迷子の子は泣いている。お巡りさんが分かりやすいほどの困った顔をしている、おそらく質問しても泣くばかりで答えられないのだろう。お巡りさんも大変だな。

（俺がしてやれる事はないな…）

そう思いコンビニへと向かう。迷子とお巡りさんの横を通り過ぎようとしたその時、ふと迷子の子と目が合った。どうやら女の子のようだ。

（こんな小さい子から目を離すとは…親は危機管理がなってないな

〈数時間後〉ラボ

「………」ポカーン

「ただいま……」

「……」（オカリンの後ろに隠れてる）

「あ……ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

おれたちはオカリンにコンビニにお使いを頼んだら子供を連れて帰ってきた、何をry」

「岡部……その子は……？」

「絢ちゃんじゃないよねー？どこの子かなー？」

「………」

「……」ダキ

「岡部なんとか言いなさいよ、それとプリンは？」

「牧瀬氏、この状況でプリンの安否確認をするとは……」

「あ、そうそうジューシー唐揚げNo1はー？」

「いや2人とも！そんな事はどうでもいいっしょ！とにかく、今の状況を整理すべき！」

「どうしてこうなった……」

「……」ギュー

〈数時間前〉 道の真ん中

「落ち着け！落ち着くんた俺！これは……そう！夢だ！夢なんだ！そうかー夢かー夢ならしょうがないなー、夢なら覚めるよなー、おか

しいなーほっぺたつねっても痛いぞ？」

「えっぐ…パパどこいったの…えっぐ」ポロポロ
……………」

(待て、これは機関の陰謀だ！きつとそうだ！そうに違いない！そもそも『パパ』だと！？)

『ダディ』や『ファザー』のアレか？つまり日本語に訳すと『お父さん』『父親』ということか！？だが待て！待つんだジョー！！俺に子供はいない！というか俺は童 だ！子供なぞいる訳ないのだ！そうか、そうだよ。きつと人違いだ、いや人違い以外なにあると言っただけだ！！何を慌てていたのだ！やましいことなぞ何も無いではないか！なに、少しビツクリしただけだ、不意打ちくらっただけだ。なにも焦ることはない)【この間実に2秒】

「…えーと、少女よ」

「…？」

迷子の少女はこっちを見上げ、涙を目にいっぱいにして俺を見つめている。

「お父さんやお母さんはどこにいるのだ？」

「…？」

少女は首を傾げた、俺の質問が不思議だったのだろうか。だがしだいに少女はゆっくりと腕を動かし俺を指差した。

「…」ズーン

「…」ゴシゴシ

クル「…」

後ろに振り返っても俺の後ろには通り過ぎていく人だけ。

クル」……」

前に向き直っても少女は俺を指差している。

「……………ゴホン」

「パパ？」ズズー

どうやら言っている言葉の意味が通じてないようだ、見たところ4〜5歳といったところか、だがその歳ならこれくらいの質問には難なく答えられるはずだが……。

「あゝ、うん……えーと……、今日はお父さんとお母さんどっちと出かけんだ？」

「……うーん」

少女は急に困った顔して考え始めた。

「分から……ない」

「……ズーン」

これは一体どうしたものが……。

「では迷子になる前はどこにいたのだ？」

「うーん……」

「分から……ない」

「……ズーン」

(どうしたものの、交番に連れて行こうか、だがさっきお巡りさんに勘違いされたままこの子を押し付けられたし、いや押し付けられたというか、父親と勘違いすれば当たり前か。

いやでも勘違いするなよ、これって結構重大なミスじゃないか？ いやでも「パパ」と思いつきり抱きつきに行ったのならその人が父親だと思ふよな、普通)【この間実に10秒】

「パパーお腹すいたー」グイグイ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「少女よ、お前のパパは本当に俺か？パパの名前を言ってみろ」

「……おかべ……りんたろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「え？」

（何で知っているんだ俺の名前を！？俺は名乗ったか！？いやまだ名乗ってはいないはず、名札なぞ付けていないぞ、もしかしてその顔に書いてあるのか！？いやそんなマンガみたいなオチ現実にある訳ない。では何故見ず知らずの少女が俺の名を知っている！？ああそうか、そうなのか、俺が有名すぎてもはや名前を知らぬ者はいないのだ。きつとそうだそうに違いはない、それじゃー名前を知っているても不思議じゃないなー）【この間実に2秒】

「すいませーん、私の名前を知っていますかー？」ニコニコ あははー

「え、いや、知りません……」サササー

見知らぬ人に声をかけ、俺の名前を聞いてみたらドン引きされた上にすごいスピードで離れて行ってしまった。

「パパーどうしたのー？」

少女が近寄ってくる。

「……」

「パパ？」

「少女よ俺はお前のパパではないぞ？」

「え…パパ？」

「いや、だから俺はお前のパパではない、お前のパパに似ていようとも俺はお前のパパとは違うんだ」

「…」ポロポロ

「あ…」

「パパ、わたしのこときらいなの？わたしはいらなiconなの？」ポロポロ

「待て、泣くな！分かった！分かったから！」

「えっぐ、えっぐ…うええええん！」ダバダバ

少女の目から滝のように涙が流れ出した。

「あ、え、あ…」【パニック状態】

「エーンエーン！」ダバ

「…」
「あらあら どうしたのかしら 兄弟ケンカ？ ほっときなさい」

周りからの目線とヒソヒソ声に俺のガラス細工のハートが碎けそう
だ。

「え、えーとえーと」あたふたあたふた【パニック状態】

「えーん、えーん」ダバ

「分かった！分かったから！俺が悪かった！」

「えーん、えーん」ダバ

「パパが悪かった！冗談で言ったんだ！お前はパパの子だ！」

「…」ピタ

迷子の少女はピタっと泣き止んで目を擦りながらこっちを見ている。

「えつぐ、えつぐ…本当？」

「本当だ！パパが悪かった！謝る！」

「パパー」グス

「な、なんだ？」

「お腹へったー」グ

「…分かった、何が食べたい？」

「ハンバーグ…」グス…

「分かった…それじゃ付いてきなさい」

「パパー」うん「ニギー

少女は泣き止み俺の手を握って俺に付いてきた。

（どうしてこうなった、なにがいけなかった、どこを間違えた、これからどうしようかry）

「…」ニコニコ

ハンバーグが食べれると知って迷子の少女は機嫌がよくなった、（もしかしてあの涙は演技だったのか…？）そんな事を考えつつ俺は迷子の少女を連れ行きつけの店に向かうことにした。

（行きつけの店）

「お帰りニヤさいませ！ご主人様！何名様ですか？」

「2人だ」

「分かりました！2名様ご案内しまーす！」

「パパ あのおねーさんねこのみみついてるー」

「そうだなー」
行きつけの店といえはけやっぱりこの店になる、サンボもいいが
そこは牛丼屋だしな。

「ご注文はお決まりですか？」

「ハンバーグ…」キラキラ

「ハンバーグ1つとコーヒー1つ」

「分かりました」

「…」キヨロキヨロ

「珍しいか？」

「…」コクン

「そうか…」フフ

(…って「フフ…」じゃないだろ！どうして迷子の見ず知らずの少女とメイクインにゃんにゃんにゃんに来ているのだ！？これってモはや誘拐罪が適用される状況じゃないのか！？いやしかし！俺はこの少女のパパ！…あれ？パパだっけ、あーパパならしょうがないな！
『パパ』なら…って違う！俺はパパではない！俺は童 だ！子供なぞいるはずがない！そもそもなぜ見ず知らずの子供が俺の名前を知っている？『パパ』と呼び、こうホイホイ付いてくるのだ！？近頃の子供は皆こんな感じなのか！？いやそんなわk)

「凶真」

「フエ、フエイリス」

「ねこさんだ」(小声)パチクリ

「お帰りなさいませだニヤ、今日は小さいご主人さまと一緒にニヤ
ー？」

「あーうん、そうだな…」

「…」パチクリ

「この子はどこの子かニヤ？」

「あーうん…この子はだな…」

「パパーいまこのおねえさんのみみうごいたー」

「パ…パ…？」ジリ

「フェ、フェイリス？これはだな…話せば長くなるのだが…」
「…？」

（説明）

「そ、そういう事なのかニヤ…、でも流石に無理があるニヤ…」

「いやこれ全部本当の事だからな？嘘偽り、脚色いつさいしていないぞ？」

「おいし〜」もぐもぐ ニコニコ

（どつやら嘘は言っていないみたいなのニヤ、だとしてもこんな事
つて…）ジー

「フェ、フェイリス？」（汗）

「たまねぎいやー」カチャカチャ

「…この子の名前、なんて言うかのニヤ？」

「そう言えば聞いてなかったな…なあ迷子少女よ、お前の名前はな
んと言うのだ？」

「ふえ？なまえ？パパ…わたしのなまえわすれちゃったの…？」う
るうる

「いや、いや違うぞ！これは…その…訓練だ！ちゃんと自分の名前
が言えるかどうかお前を試してるんだ！」

「…ゴツゴツ」

「それで、あなたのお名前はなんていうのかニャ？」ニゴリ

「…おかへ…」

運命のいたずら

数時間後ラボ

「さあ岡部、説明して頂戴。その子は一体誰なのか、どうしてこんなに遅くなったのか」

「この子はだな…」

「くりす…おばさん…」ジ―

岡「なに!?!」

紅「ふえ!?!」

ダ(言っちゃった…おばさんって言っちゃったこのロリっ子…)
ま「うーん?」

「紅莉栖、この子と顔見知りか!?!」

「知らないわよ!?!ていうかオバサンって…」orz

「牧瀬氏…ドンマイ…」

「ダメだよ、紅莉栖お姉ちゃんでしょう?」

少「…」ササ ジ―

少「…」ジ―

ダ(…?)

岡「どうした?」

ま「すごい見てるねー」

少「だる…おじさん…」ボソ

岡「な!?!」

ダ「うええええええええええええええええ!?!」

ま「おー、すごいねー、ダルくんの『ダル』ってニックネームなの

にねー」

紅「…」orz

岡「…」

「じゃあ、じゃあ！お姉さんの名前は分かる？」

「…」フルフル

「そっかー、ちよっぴり残念かなー、じゃあ自己紹介するね、お姉さんの名前は『椎名まゆり』って言うんだよー」

「しいな…まゆり…」

「まゆりお姉ちゃんって呼んでね？」

「まゆり…おねえちゃん…」

「そうそう、まゆりお姉ちゃん」

「それじゃあ貴方のお名前は？」

「…おかべ…」

〈数時間前〉メイクインにゃんにゃん

「岡部…りん…かにゃ？」

「…」コクン

「名字が岡部か…できすぎている…」コク

「凶真に隠し子がいたニヤンてフェイリスは驚きだニヤー！」

「!?」「ブハ

「わぁ！」「ビク

「違うと言っとなるだろっが！」「ゴシゴシ

（どつやら本当に嘘は言っていないようなのニヤ、2人と…）ジー
「ゼリー」「ペリペリ（デザート）」

「とりあえず今は凶真の言葉を信じるニヤ」

「む、本当か！というか信じて貰わねば困る」

「おいしー」もぐもぐ ホクホク

「ニヤ？この子靴を履いてないニヤ、それに…この子の服…

こういう服なのかどうか知らニヤイけど、変じゃないかニヤ？」

「そういえばそうだった、この少女裸足だったな…。

それによく見てみれば服も変だな…ぶかぶかじゃないか」

「ふーおなかいっぱい」 ぽんぽん

「ちよつと待っているニヤ」ツカツカ

「ああ…？」ズズ…

「ごちそうさまー」パン

ツカツカ

「これを履かせるニヤ」ズイ

「いいのか？というか良くあつたな子供用の靴」

「女の子に靴を履かせないで歩かせるニヤンて…凶真はジェントル精神がたりないのニヤ」

「忘れていたのだ、そもそもあの状況で気配りできるほど俺は落ち着いてなかった！」

「言い訳は見苦しいだけニヤーン」

「くっ！」

「ご主人様、履物をお持ちしましたニヤ」

「はきもの…？」

「靴の事だ、このお姉さんが気を遣ってくれたんだ、お礼をいっ
つけ」

「ありがとう…おねえさん…」

「気にすることないニヤー、メイドとして当然の事ニヤ」

「…ノノノ」テレテレ

「ふふ…かわいいニヤー、どうかニヤ？今度ウチで働いてみる気は
無いかニヤ？」

「おいおい、まだどこの子かも分からないのに…」

「それなら心配ないニヤン、フェイリスの情報網を使えば迷子の子
猫でも、あ〜っという間にみつけれられるニヤー！」

「本当か！フェイリス！」

「任せとけだニヤー！ところでこの子はこの後どうする気がニヤ？」

「んーそういえばそうだな…、フェイリスの情報網に期待したいが、
やっぱり警察に任せた方が…」

「パパ」

「ん？」

「おといれ」

「と…トイレ？」

「…」コク

「あー、フェイリスが連れていくニヤ…」

「た…頼む…」

ヒシ

「…？」

「パパなじゃきゃいや」

「なん…だと…」

「これはしばらく大変な事になりそうだなヤ…」クスクス

↳そして現在↳ラボ

「岡部…りんちゃん？」

…」コク

「かわいい名前だねー」

…」ノノノ」テレテレ

紅「…」orz

ダ「…」(灰)

「この2人大丈夫なんだろうか…(何故が知らんがダルは萌え尽きている…)」

ま「りんちゃんのお父さんとお母さんは誰かなー？」

少「パパ」ビシ

ま「んー？」

岡「はあ…」ふかぶか

ま「えー！？オカリン!？」

ダ、紅「…な、なんだってー!!」「バツ!

岡「はあ…」(苦笑い)

↳説明↳

「なるほどね↳道を歩いてたら迷子の少女と出くわし、その少女は実は自分の娘だった…」

「あるあ…ねーよ！エロゲでもそんな展開ないお、つーか誰得だよ！俺得かよ！」

「こら橋田！少女の前で『エロゲ』なんて言葉使っんじゃないわよ！」

「パパーえろげってなにー？」

「え…あ、うんツマラナイ物だ…」

「ちょ、オカリンヒドイお！僕の生きがいの1つを『ツマラナイ』で切り捨てるなんて！」

「ダルくんエツチだからねー」

「年端もいかない少女がいる限りHENTAI禁止よ！」

「分かってるお！僕もちゃんとそれぐらいのマナーは心得てるお！」

「それでどうするのよこの子。ちゃんと両親の元へ帰してあげないと」

「そうだよ、オカリンこのままだと誘拐罪でタイーホだよ？もうフラグ立ってるけど」

「でもオカリンはりんちゃんのパパ何でしょ？じゃあ大丈夫だよ！ネーりんちゃん？」

「ネー」ニコニコ

「…」ズーン

「まゆり…少し考えれば分かる事よこの子を見てこらんさい」

「んー？」ジー

「見たところ4〜5歳いつてトコかしら、そうなると岡部が14〜15歳の時に生まれた子よ？岡部は見覚えが無い（真偽不明）んだから一度も会った事が無いはずだわ」

「それなのに岡部の顔を知っていてこんなにも懐いている、どう考えても不自然だわ、

本当のお父さんと岡部を勘違いしているのよ」

「ん〜でもオカリンの名前を知ってたらしいじゃん？それはどう説明するん？」

「それは…同姓同名の岡部じゃない父親の…」

「牧瀬氏…それは無茶だよ…それに牧瀬氏と僕の名前知ってたのは何で？」

「それは本人に聞いてみるしか…」チラ

「「キヤツキヤ あははははー うわー」」

「何か…すごい自然な光景だお…」

「まったくね…」

「もしかしてあの時か…いやアレはノーカンだろ…いやでも」ブツ
ブツ

「なんかコツチはコツチで結界を張ってるお…」

「すごい話しかけづらい…何があったのかしら…」

「いやでもそんなんじゃありえないだろ…もっと他にあったんじゃ…」ブツブツブツブツ

〈数時間前〉 交番の前

「さて…」

「パパーおまわりさんにみちきくのー？」

『フェイリスはここまでのニヤ、一応この子の情報を集めてみるけど、やっぱり警察に任せた方が良さげだニヤ、最悪凶真が犯罪者になってしまふニヤ』

「まあ…これがベターな判断か」
「…？」

テクテク

岡「すいませーん」

警官「はい、どうしました。おや？貴方はさっきの…」

「迷子の子を見つけてまして」

「はあ…」「チラチラ

…」「ギュー

「どうやらこの子、私とこの子の父親を勘違いしているようです」
「勘違い…ですか？」

「はい、勘違いです」

「パパ どうしたのー？」

「…貴方の事をパパと言っていますか？」

「いや、ですから勘違いなんですよ」

「はあ…」「うーん

…？」

「ねえお嬢さん？」

「…？」

「君のパパは誰？」

「パパ」ビシ

…」「ズーン

「パパはどんな人？」

「こんなひと」「ビシ
」「……」「ズーン

「お父さんの名前はなんて言うの？」

「おかべ……りんたろう……」

「私の名前は岡部倫太郎です……」

「お嬢さん、最後に1つだけいいかい？」

……「コクン

……「タラー

「お父さん、最近変わった所とか変な所とか無い？」

「うーん……パパはずっとへん」

……「テデーン！」

「岡部さん……貴方……病院とか通われていますか？」

「えー！？いや……通っていません……！」キョドキョド

……？「？」

「持病などは？」

「あ、ありません！」「アセアセ

……？「？」

「ふー……」

「……？」「？」

「岡部さん、私はそついう道には詳しくありませんが相談には乗りますよ」

「え、え、何のことですか？」

「ふあゝ」「アングリ

「例えば人に言えない事とか、自分をコントロールできないとか、見たところお子さんをお持ちになったのはとても早かったのでしょう、辛いことも多々あったことでしょう…」

「は…はあ」

「うーん、パパーねむたい」

「スーパー人生相談タイム」

・
・
・

「そして現在」ラボ

「いやでもアレは違うだろ…でもアレはアレで…」
「ブツブツブツブツ
「ちょっとコレはヤバイ状態だと思うお…いろんな意味で」

「そうね、岡部のヤツ自分を見失っている…」

「「あははー」 キャー 「コチョコチョコ」 イヤー 「アハハー」」

岡「どうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなった」
ブツブツ

運命のいたずら(後書き)

少し蛇足な部分もあったかな

似てるけど違う、違うけど変わらない

（ラボ）

「スース」スヤスヤ

「りんちゃん眠っちゃったねー」

「どうするん？これから」

「どうするもなにも…警察に届けるしかないでしょ…」

「でももうこんな時間だし、今日はもう誰かがこのロリツ子の面倒をみないといけないお」

「ロリツ子ってゆーんじゃないの、そうね…明日警察に届けましょ」

「うーん、でもどうするのー？りんちゃんラボに泊めるの？」

「それしかないっしょ」

「でもこんないたいけな少女をこのHENTAIが集まるラボに泊めるのも気が引けるわ…」

「えー、大丈夫だよー、それにダルくんもオカリンも紳士だから大丈夫！」

「まゆり…」

「牧瀬氏…そこら辺は僕でもちゃんと線引きしてるお、yesロリ
ータノオタツチ！」

「それに、まゆしいも今日はラボに泊まりますので！」ビシ（敬礼）

「ええ！」

「それが一番じゃね？オカリン精神的に参ってるし」

「でしょー？実はもう家にOKは貰ってあるんだ」

「まゆ氏、手際いいね」

「大丈夫かしら…」

「大丈夫大丈夫！」

「ほんと…どうしてこんな事になったのかしら、これって結構アウアウな状況じゃない？」

「うーん…でも主犯はオカリンだし、僕たちは潔白だお」

「りんちゃんのパパはオカリンなんだから大丈夫だよ」

「まあ…そんな事言っられるのも今のうちかもね」(苦笑い)
「明日になったら誘拐事件になって、TVで取り上げられてたりして…十分ありえるお」

「でもでも、本当にオカリンがりんちゃんのパパかもしれないよ？」

「そうだといいんだけ…いやよくないでしょ」

「牧瀬氏、複雑な心境」

「え？いや…ちがっ！」

「ところで、肝心のパパは何してるん？」

「オカリンなら今電話中だよ」

「そうか…分かった。ありがとな。じゃ、またな」ピッ

「オカリン誰と電話してたん？身代金の要求ですか？」

「橋田…そのジョーク笑えないから…」

「そうだよー、オカリンをイジメちゃダメだよ」

「フェイリスから迷子の少女についての情報を聞いていたのだ」
「フェイリスさんから？それで、何て言ってたの？」

「情報なし、手がかりなし、だそうだ」

「そう…」

「いや、それおかしくね？女の子1人行方不明になったら大騒ぎになるっしょ、普通」

「仕方ない、今日は交番に届けてもダメだったから、明日警察署に迷子少女を届けるか」

「そうね、でもあんた1人でいっても交番の二の舞よ、明日は私も付いていってあげる」

「もしかしたらオカリン、警察署に行ったらそのままタイーホ…」

「ダルくん！」

「…ごめん、自重するお」

「それじゃあ今日は解散ね」

「そうだな…」

「何か、少し疲れたお…」

「りんちゃんとお泊りお泊り」

「うーん、パパ？」
「ゴシゴシ」

「お、起きたか」

「おなかへった」
「グー」

「そうか…何か買ってくるでしょう」

「それじゃ帰るとしますか」

「僕も」

「それじゃ買い物ついでに2人を送ってくる、まゆりは迷子少女と

風呂にでも入っててくれ」

「了解なのです！」ビシ

「それじゃありんちゃん、まゆりお姉さんとお風呂にはいるー！」

「おふる？」

「うん、といつてもラボにはシャワーしかないけど」

「おふるはいる」

「でわ、お風呂へレッツゴー！」

「！ー！」

ワーワーキヤー

「なんか…手馴れてるわね…」

「まゆりは誰とでも仲良くなれるからな」

「姉妹にしかみえないお」

「それじゃこつちも行くか」カチャ

「そうね」キー

「じゃあねーまゆ氏ー、また明日」バタン

・
・
・

くスーパーからの帰り道

「流石にコンビニで済ませせるのも気が引けるしな、これでいいだろう」ガサガサ

（にしてもなんて1日だ。今日は夜まで未来ガジェットの制作をし

ようと思っていたのだが、コンビニじゃんけんで負けたばかりに……。だがもし俺が負けていなかったら迷子少女はどうなっていたのだろう、警察に通報されて今頃は両親の元へ帰れただろうか……。そう考えると不運なのは俺じゃなくあの迷子少女の方か……。)

反省と自責の念を感じながらラボへと向かう。

カチャ

「鳳凰院凶真、ただ今帰還した！まゆりよ、ちゃんと風呂に入っ……た……か……？」ポカーン

「え、あ、オカリン！？」アタフタ

「まゆりおねえちゃん、まえみえない」

扉を開け中に入ってみると、下着姿のまゆりが迷子少女の髪を乾かしていた。

「な！す、すまん！」バ

「あーごめんねー、シャワー浴びた後だから暑くて……」アハハー

「パパ！」ダツシユ

「な、おおおお前ももう一枚なにか着ろ！！早く！」

「……？」ダキー

(ふう、なんだと言うのだ、だいたいまゆりは危機管理がなっていない。もし俺じゃなかったらどうなっていたか……。まあちゃんと鍵はかけてあったが……。)「はあ〜」ふかぶか

「オカリン、もういいよ〜」

「お、おう……」オソルオソル

「ほら、飯だ、歯ブラシも買ってきたから食ったら磨くように」

「ありがとうオカリン」「えへへ〜」

「ぱぱありがと」「ニ」「ニ」

それから遅めの夕食となった。

「ぱぱ！あーん！」

「な！？」「／／／

「おー！オカリンあーんだって！あーん！」

「いい！俺はいいから！まゆりお姉さんに上げなさい」「アセアセ

…」「シユン

「ダメだよオカリン、せつかくりんちゃんがあーんしてくれたのに」

「まゆりおねえちゃん…あーん」

「あーん ん、おいしー」

（なぜ俺が悪者なのだ…）

・
・
・

「じゃあ飯も食ったことだし、寝るとするか」

「そうだね」

「ねえ〜パパ」

「ん、どうした？」

「ママは〜？」

「…うーんと」

「ママか…お前は何か知らないのか？」

「…」「コクン

「りんちゃんママってどんな人なのかな？」

「ママ、きれい」

「そうかーりんちゃんのパママ綺麗なんだー見てみたいな」

「…」

「ママ…」

「シユン

「…」

「うーん

「ま…ママは今お出かけ中だ、近いうちにちゃんと帰ってきてくるぞ！」

「…ほんと？」

「…」

「ああ、とりあえず今日はもう遅い、ちゃんと寝ないとママに怒られるぞ」

「うん…」

「…」

それから寝ようとしたところでまた少しゴタゴタが起こった。寝る場所と言ってもソファーぐらいしかなかったため、まゆりと迷子少女をソファーで寝かせようとしたら、迷子少女が俺と一緒にいいと言いだし、それはそれでアウトなので、仕方なく、買ったがあまり使わなかったビミョーな面積のカーペットを敷き、その上にまゆり、迷子少女、俺の3人で寝ることになった。

「えへへオカリンと寝るのは何年ぶりかなー」

「どうしてこうなった…」

「…」

見事に川の字で寝ると言う言葉を完璧に体現している。端っこに俺とまゆり、真ん中に迷子少女の配置になっている。

「こつしてみると家族みたいだね」

「いや、それはどうなんだ？」

「はーい」

「ん？」

「うわき…」

「！？」「ゴツホゴツホ

めちゃくちゃむせた。

「ママ…ないちゃう…」

「あー、いや、それは…」

「あー、そうだねーこれだと浮気になっちゃうねー」「ニ」「ニ」「ニ」

「いや、笑ってないでフォローしてくれまゆり…」

「うわき…」

「うーん、まゆしいはお手上げなのです」「ニ」「ニ」「ニ」

「もういいから寝ろ…おまえたち…」

「うわき…」

「はーい」

・

・

・ Z Z Z

（翌朝）

紅「心配だから早めに来てみたら…」（小声）

ま、少、岡「zzzz」スヤスヤ

(なんなの？この幸せそうな空間は、少し羨ましい…)

(こんなことなら私も泊まればよかったかしら…)

(それに何か…ズルい…まゆりばかり…)

ソロー もぞもぞ

(へへ)ノノノ岡部の隣に入り込んだ、まあ少しだけならいいでしょノノノ)

(温かい…眠くなってきちゃった、心配だったからあんまり眠れなかったのよね)

(まあ、少しだけなら…zzzz)

ま、少、岡、紅「zzzz」スヤスヤ

萌「…」

萌「…」カシヤ ニコニコ

(まゆりさんからメール貰って来てみたけど、本当に知らない子がいる)

(仕事に行く前にちょっと寄って見たけどこれはいいものが見れた…)フフフ

キー…ボタン

ま、少、岡、紅「zzz」スヤスヤ

ダ「…」

(コンビニで時間つぶそ…)

キー…ボタン

ま、少、岡、紅「zzz」スヤスヤ

・
・
・

似てるけど違う、違ってるけど変わらない（後書き）

ほのぼのは正義

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1955z/>

【Steins ; Gate】 永久不変のアフェクション 二次創作

2011年12月20日00時54分発行